

Social Workers

社大OB・OGがつむぐ福祉の絆

ソーシャルワーカーズ

2011

12月
Vol.6


患者さんに寄り添い、 生活を支援する

患者さんに人としての尊厳を
失わせないこと



こまつ ちよみ さん
小松智世美 さん

元 太田綜合病院
医療ソーシャルワーカー

医療ソーシャルワーカーは、
医療専門職と連携しながら、
患者さんのよりよい生活を支援します。



いわ さき あい こ さん
岩崎 藍子 さん

東大和病院
医療福祉相談室勤務
医療ソーシャルワーカー

患者さんや家族に寄り添い、
様々な不安の相談に乗ります

主役はあくまでも患者さん 医療ソーシャルワーカーは相談役

—患者さんの「これからの生活」を一緒に考える—

社会福祉学部福祉援助学科
2007年3月卒

いわ さき あい こ
岩崎 藍子さん

社会福祉士 精神保健福祉士

東大和病院医療福祉相談室
医療ソーシャルワーカー

PROFILE

1984年 東京都調布市生まれ

2007年より社会医療法人財団 大和会 東大和病院
地域医療連携センター 医療福祉相談室勤務



その人に応じた 方針を相談

医療ソーシャルワーカーとして5年目になる岩崎さんの朝は、電子カルテのチェックとミーティングから始まります。勤務する東大和病院は、年間5千台を超える救急搬送を受け入れる、病床数274床の大規模な病院です。

急性期医療を受け持つこの病院では、入院した患者は、症状が落ち着けば自宅へ退院したり、状況によっては他の病院に転院したりしていきます。しかし入院の後で体の状況が大きく変わる方も多く、その後の生活に不安を抱えています。

医療ソーシャルワーカーは、そういった患者や家族の「これから先をどうするか」を一緒に考え相談に乗り、よりよい生活のための支援するのが仕事です。

「私たちは、その患者さんに応じてリハビリや転院など、家庭事情も伺い、寄り添いながら次の段階を一緒に考えます。でも、



東大和病院

一人の患者さんを チームで支える

決めるのはあくまでも主役である患者さんとそのご家族です」。

医療ソーシャルワーカーは「チーム医療」のメンバーの一員として仕事をしています。担当医師、看護師、リハビリ担当、薬剤師、栄養士、支払い窓口の事務職など、多職種のメンバーが連携して一人の患者さんとその家族を支えます。

岩崎さんは担当医師とともに病棟を回り、入院患者への病状説明に同席し、患者やその家族の必要に応じて面談を行います。

面談は予約制で、初回には1時間ほど時間をかけて問題点を整理し、じっくりと話を聞きます。

相談内容は、病気への不安や経済的な問題、家庭の事情など様々です。医師からリハビリ専門病院や老人福祉施設などを勧められた場合は、かかる費用や転院先の所在地、患者の希望などに沿って相談しながら決めていきます。

患者さんの 朗報にやがて

岩崎さんは現在、脳外科と消化器科担当です。多いときには1日に入院患者30人ほどに加えて、一般外来患者5、6人と面

談することもあるといいます。

その間、救急外来からの呼び出し電話にも迅速に対応します。救急外来で運ばれた患者が身元不明の場合は身元の追跡調査を行い、保険証がない場合は生活保護が必要かどうか役所へ問い合わせたりします。

忙しい日々の中で、「転院された患者さんがリハビリを経て家庭に戻れたといったうわさをお聞きしたときには、ああ、よかったなあ、とホッとします」とこの仕事のやりがいを話してくれました。

迷いながら寄り道しながら決めればいい

病院や福祉の仕事に興味があった岩崎さんは、高校の先生に紹介された日本社会事業大学のオープンキャンパスに参加した時、大学の授業内容と学生の雰囲気について「こーだ」と直感しました。在学中に、精神保健福祉士の資格を得るために学習した知識は今も役立っています。

「実際に働いてみてわかりましたが、福祉の仕事は児童だとか高齢者だとか分かれているわけではなく、どんな人ともつながっています。学生時代には分野にこだわらず、迷ったり寄り道しながらいろいろな体験して、進む道を決めていけばいいと思います」。

人間の人権と尊厳をいつでも大切に

—福島県の「医療ソーシャルワーカー」のパイオニアとして—

日本社会事業短期大学本科
1957年3月卒

こまつちよみ
小松智世美さん

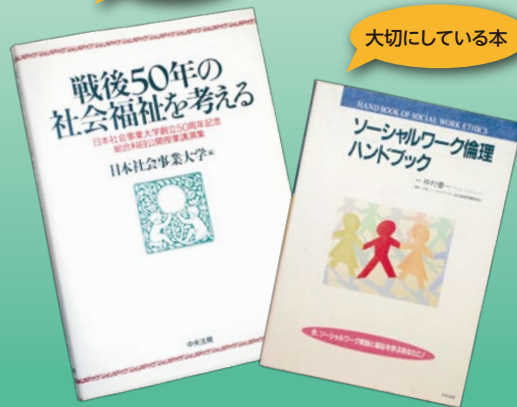
元 太田綜合病院
医療ソーシャルワーカー

PROFILE

1937年 福島県生まれ
1959年より財団法人太田綜合病院にソーシャルワーカーとして40年間勤務。在職中より看護学校講師や、協会理事等を務める

講演の記録

大切にしている本



○小松智世美さんのあゆみ

1957年	日本社会事業短期大学本科卒業
1959年	財団法人太田綜合病院にソーシャルワーカーとして就職、医療社会事業部を創設
1961年	福島県内の7病院と連携して、福島県医療ソーシャルワーカー協会を設立（理事・副会長）
1977年～	日本医療社会事業協会常任理事（3期6年）、日本ソーシャルワーカー協会委員・福島県支部理事（事務局長）を務め、研修会などを実施 太田綜合病院附属高等看護学校・福島県立医科大学看護学部・福島県立総合衛生学院講師
1986年	生命倫理委員会の設立メンバーに任命 病院内の主任、係長を経て医療社会福祉科長 医療福祉活動の功績に対して、福島県知事より感謝状が贈呈
1989年	定年退職 特別養護老人ホームや介護老人施設の第三者委員、評議員、福島県立会津大学短大学部非常勤講師
1993年	日本社会事業大学社会福祉学会（木田）賞を受賞
2006年～ 2009年	福島学院大学評議員
2010年	福島県医療ソーシャルワーカー協会設立50周年記念大会で功労者表彰

第一号のソーシャルワーカーとして

小松さんは日本社会事業短期大学（現大学の前身）を卒業後、「新しい地域医療を目指してソーシャルワーカーを導入したい」という財団法人太田綜合病院に、福島県内で第一号のソーシャルワーカーとして就職しました。

1959年当時はまだ「ソーシャルワーカー」という言葉も一般的ではなく、まずは病院内の医療従事者に、福祉の視点から患者を支えるソーシャルワークの必要性や仕事内容を知ってもらうことから始めました。

「たった一人で少しずつ周囲に認知してもらえらるまでの日々は長かった」と小松さんは語ります。

40年で1万2千人と面談

ソーシャルワーカーとして最初に受け持った患者は、服毒による自殺未遂の青年でした。救急措置で一命を取り留めた後は、地域の保健婦と連携して半年ほど見守りを行い、医療処置とは別の視点で患者を支えるソーシャルワーカーの必要性を痛感したといえます。

40年という長い年月のなかで、小松さんは1万2千人もの患者や家族と面談してきました。

「寝たきりのおじいちゃんを医者に診てもらいたい」「生活保護の申請をしたら糖尿病だとかわかった」等々、小松さんは受けた相談内容を整理してソーシャルワーカーが引き受ける問題かどうかを

見極め、面談を行い、相談内容を整理して院内の医師や看護師、地域の関係者等に連絡を取りながら、支援を行いました。

病院に必要なソーシャルワーカー

勤務して2年目には太田綜合病院の院長の後押しを得て、県内7つの病院のソーシャルワーカー7人とともに福島県医療ソーシャルワーカー協会を設立しました。

「何もかも手さぐりでしたが、職能団体の中で勉強会などを開催して互いに切磋琢磨してきました」。

小松さんの仕事ぶりは、医療ソーシャルワーカーという存在を少しずつ病院内外に浸透させていきました。太田綜合病院の来院患者だけでなく、福祉事務所や民生委員、地元の開業医などからも患者が紹介され、その相談が初年度は年間160件にもなり、それ以降は病院内のソーシャルワーカーも年々増員されていきました。現在は4つの系列病院に21人が働いています。太田綜合病院を通して、県内の他の病院にも医療ソーシャルワーカーが必要なが広がっていききました。小松さんは後輩や部下の指導にも力を入れ、今ではソーシャルワーカーの志を引き継ぐことができたと感じています。

医療と福祉で 異なる視点と接点

医療と福祉は、患者のために働くという目的は同じでも、視点と手法は異なります。

「たとえば、昼夜を問わず救命救急センターに搬送される患者さんの多くに、医療者はまずハサミで衣服を裂き気道を確保します。ソーシャルワーカーは患者の受療態勢を整えます」。

小松さんは、自分以外の職員はみんな医療従事者という職場の中で、「福祉の立場から申しますと…」と意見を述べることで、理解と信頼を得てきたといえます。

「医療従事者は治療のために全力を尽くし、検査や手術が必要であればまず日程を決めますが、その時に患者さんや家族が納得し同意できるように調整するのも仕事でした」。

また、太田総合病院内に生命倫理委員会が設けられた際、委員に任命されましたが、治療薬使用や新しい治療法の導入に対し、ソーシャルワーカーの視点をもって臨んだとのことでした。

正確な時を刻む 時計であれ

小松さんはソーシャルワーカーの視点として一番大事にするこ

とは、人間の人權と尊厳を大切にすることだと言います。

「人はどんな状況で最期を迎えようと、人間としての権利が守られなければならない。患者さんに人としての尊厳を失わせてはなりません。ソーシャルワーカーはそれを決して忘れてはなりません」。

この理念の社会的認知がまだ希薄でつらい日々だった時、太田総合病院長からの言葉「あなたたちソーシャルワーカーは、正確な時を刻む時計。医療者が、この治療は人間を大事にしているかと確かめたい時、振り返ってみる時計であれ」に支えられました。

40年を歩み実績を積み重ねてきた小松さん世代の足跡があったからこそソーシャルワーカーは今日、医療者からパートナーとして、医療現場に不可欠な存在と認められているのです。

一生をかける1つの できる仕事

仕事では白衣着用でしたが、退職後の生活は和服で過ごすことも多く箏曲師範でもあるという小松さんは、仕事と子育て・老親の介護等家庭生活との両立を、夫と協力し合って実現してきました。

「ソーシャルワーカーは、患者

さんの日常生活を支援しますから、その中でこの仕事を通して自分自身も成長する実感が得られます」とこの職業の魅力を語ります。

「一生の仕事にできるのは、男性女性にかかわらず結婚や家庭生活との両立を可能にする知恵が得られるからです。そして病院以外の職場に変わってもソーシャルワーク実践は変わらないので、キャリアアップとなるのも強みです。目に見える日々の業務は一見雑用のようにも見えますが、その基本理念は学問的、学術的で専門職であることに支えられます」。

「いつの時代でも、自分らしく生きることをはばまれて苦しむ人はいるのです。ぜひ高い志をもつて目指してほしい職業です」と、ソーシャルワーカーのやりがいと将来性を示してくれました。



後輩・部下の指導に当たっていた頃

MSW + 医療ソーシャルワーカーって何???

医療ソーシャルワーカーは、メディカルソーシャルワーカー (Medical Social Worker) の頭文字をとってMSWと呼ばれています。ここではその仕事内容について紹介します。

Q 「医療ソーシャルワーカー」とはどんな人ですか？

A 福祉の専門家として、おもに病院などの医療機関や老人保健施設、在宅介護支援センターなどに勤務しています。医師・看護師・理学療法士などと連携して、患者さんの病気や生活状況に応じて「これからの生活をどうするか」といった問題について相談を行います。転院先の病院や福祉機関と連絡を取り合いながら、よりよい生活への支援をします。

Q 医療ソーシャルワーカーの資格制度がありますか？

A 医療ソーシャルワークの業務を行うには福祉の専門知識が必要なため、病院などに勤務するには社会福祉士の国家資格を持つ人が求められます。なお精神科の病院などでは精神保健福祉士の国家資格が求められます。

Q どのような相談に乗ってくれるのですか？

A 療養中の医療と生活に関するあらゆることの相談に乗ります。

- 経済的 入院費、治療費、生活費などの相談
- 心理的 病気や転院・退院後の生活に対する不安など
- 社会的 会社や学校のことなどが心配なとき
- 制度的 保険や年金など利用できる制度について
- その他 誰に相談すればいいのかわからない悩み

このように医療機関などの場で、患者さんとその家族が直面する様々な問題を解決するために、相談者の話を聞き、保健医療の専門職と連携して必要な支援をするのが医療ソーシャルワーカーの役割です。